ヤに目を凝らしていると、キリンのぼんやりとした影が見え始め、やがて完全にモヤから脱け出るとキリンは絶望した様に首を振りました。

気がつくと、僕はやっぱり午後の陽差しの中にいて、目の前にいるキリンはその長い首をがっくりとうなだれていました。

「大丈夫？」と、聞くと、涙をこらえる様にその大きな目を瞬かせて顔を上げ、「あなたの持っている鍵は、あなたを毀さない限り私には手に入れられないものなのです。でも私はそんな事をしてまで……」

僕には何の事かさっぱりわかりませんでしたが、とにかく慰めてあげなきゃあと思い、「でも、きっとそのうち別の鍵は見つかるさ。きっと！」

「そうだね」と、キリンはゆっくりうなずき、僕に背を向けて歩き出しました。

コ・コン　コ・コン
コ・コン　コ・コン
コ・コン　コ・コン

淋しく胸を刺すその足音は、冬の名残りを流す道の彼方へと消えてゆきました。

これは、僕の一番だいじな早春の幻……。

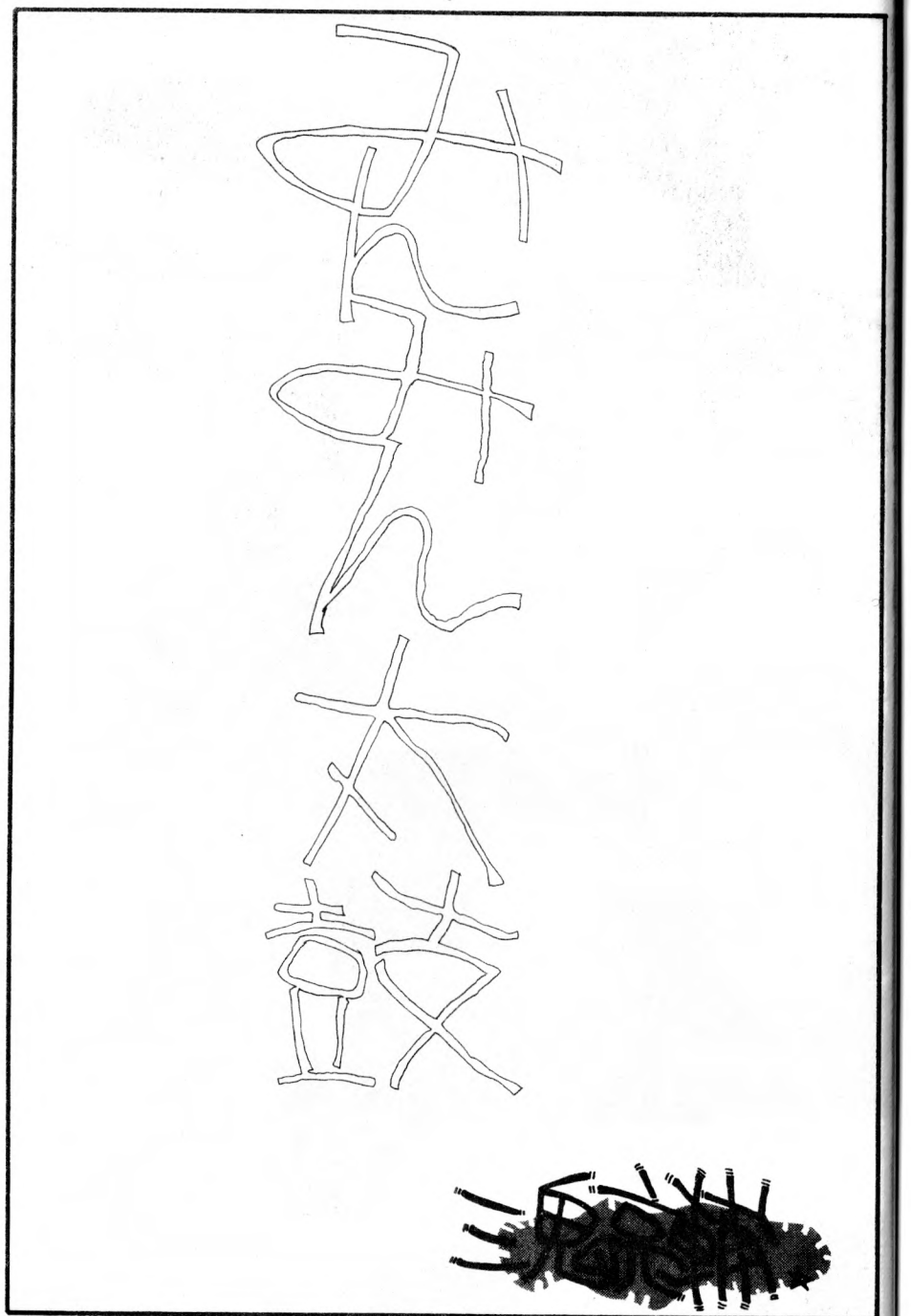
牧人懐古

アーカディアの森は亡びてありし日の愉悦果てぬ、
古えの世の養いは夢なりき、さるを世は今
紺色の真理をこそは
もてあそべ、しかも心の
泰らぬその面ざしや——
「さはれ世の悩める児らよ
「時」のうたう狂える曲に
わびしらに合せ踏りて
旋りつつ移ろい逝きし
ものぞ多き、多きがなかに
言葉こそ愛でたかりけれ。

☆　☆　☆　☆

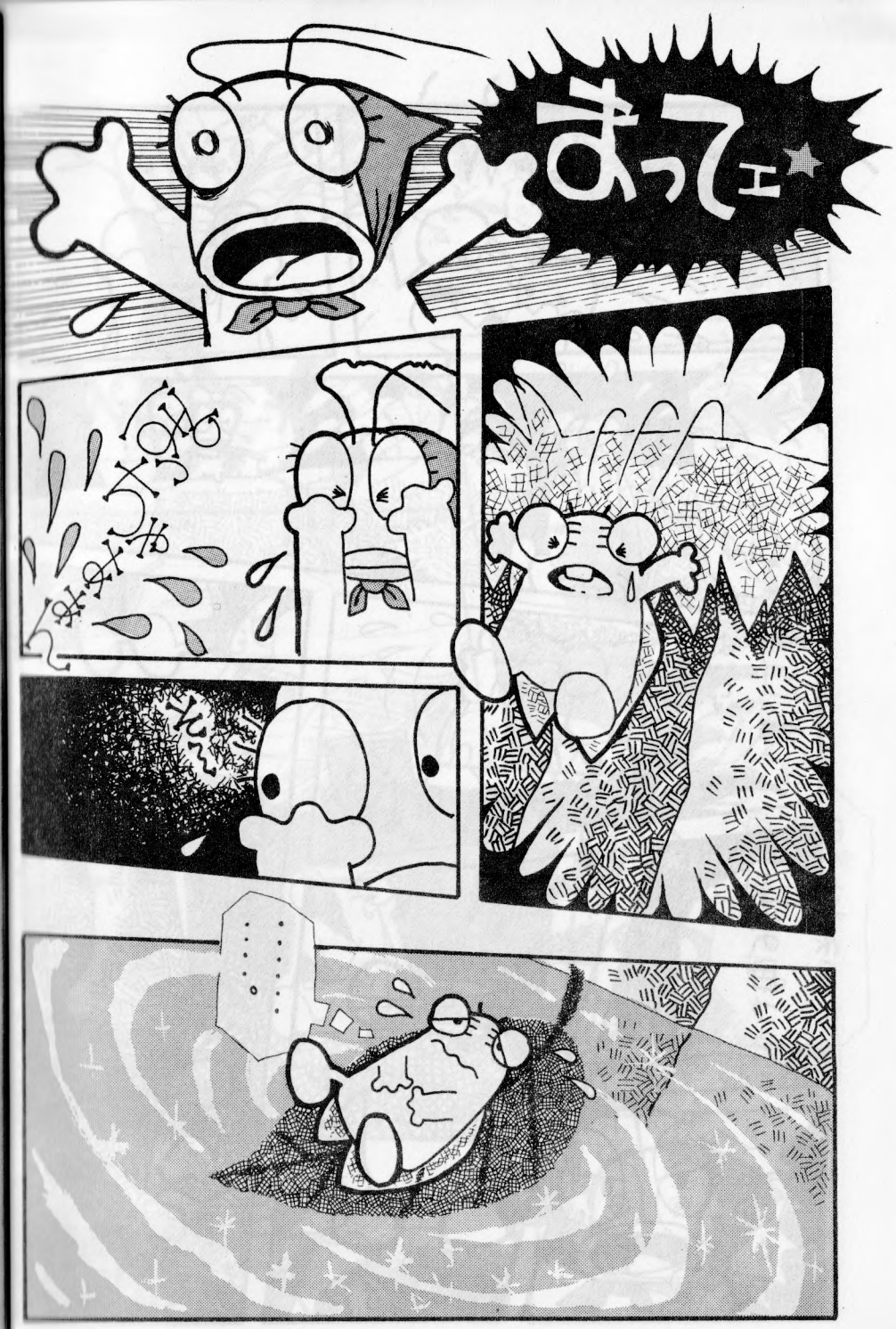
（イエイツ詩抄〈山宮允訳〉）

おしまい



ひゅごごごぅぅ…
さむいよ〜
日が落ちるまでに帰らなくっちゃ★
ふ…ふ…
こんな季節にセミが……

ぐしゅん…
えーん★
……
えーん★
よいしょ…
ぐらぐらぐらぐら
あの日つき……
あっ☆


まってェ★
ぶるぶるぶる
ぶるぶる

あぶないわねえ…
今は水が冷たいから
死んじゃうわよ。
いいんです。
ぼく
死んじゃう
つもりでした。

ぼく、生まれてこなければよかった。

そんなこと言ってはだめ！

だってェ…

赤ちゃんだったころくらい土の中ではやく外にでたいなあって、思ってたの。

オケラさんが教えてくれた…外の世界は広くて、明るくて、きれいで…

…だけどぼくがやっと成虫になって外にでてみると…

ざっぷーん

HIGE NO TAKAHAMA.

かわいそうに夏はとっくにおわったんだよ。

外世界はとってもさむくって、仲間はみーんな死んじゃってたの。

それでも毎日、仲間をさがして…

でも、やっぱり…

……。

でもね…
だからといって命をそまつにしてはいけないわ…
どーせ外の世界にでたらすぐ死んじゃうもん！
生きていてもしょーがないもん！

あたしがまだ幼虫だった頃…
お日さまの光がまぶしくて木の葉がいっぱいあった頃…
ちゅ～～～
たくさんのセミさんがいたわ。みんな楽しそうにあそんだり食べたり…
そしてひまさえあれば太鼓をたたいていたわ。
みーん
みーん

みーんみーんってね……
そう、それと同じ太鼓をね…
みじかい命のほとんどをつかって、たたいていたわ。
今、考えるとあの太鼓の音がー
あのみ~んみ~んっていう音が…
ぼくがここに生きていますよーって聞こえるわ。
みじかい命だからこそ一所懸命たたいていたのね。
みーん
えへへへ…
ありがとうコオロギのおばさん。ぼく、ひとりぼっちでも一所懸命太鼓たたくからね！
神さま…